

2月7日は北方領土の日、そして、2月22日は竹島の日である。海洋国家であるわが国にとって貴重なこの島々は、先の戦争において、敗戦後のどさくさや、占領統治を経て主権回復の過程で、不当な軍事進攻を受け、今も他国の実効支配下にある。条約や国際法を無視したこの侵略行為も、時を経ていまや国際社会の秩序に受け入れられている。

時折、2島返還などという騒ぎはあっても、期待するのも愚かな願望であり、奪われた領土が好意的に返ってくることは断じてない。

「固有の領土だ！」と叫び続ける意味はあるが、その意味すらあと30年で消滅してしまふ。100年も経ってしまえば、長年の既成事実が、「歴史の一部」に昇華してしまふからだ。「覆水盆に返らず」、このことを肝に銘じて、二度と大切な島々を奪われないうように、抑止力を強化するしかない。

返らない過去を嘆くより、過去を調べ過去に学ぶことが大事だ。奪われたものを平和的に取り戻すことなど、幻想に近い。ましてや、われわれ国民自身が奪われたものに関心を示し、執着して問題意識を持たなければ、その道は遠のくばかりだ。敗戦によって奪われた大切なものは、何もこの島々だけではない。メディアの多くは、基地といえば沖縄のことばかり、しかも、あくまで反基地であり、反政府であって、「反米」ではない。

本来、日本政府を批判する前に、米国に

異国の空 —横田の壁—

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

対し物申す「反米」が筋ではないか。実は、驚くことに沖縄以上に不合理的な損害を被っているのが、首都東京である。

トランプ大統領がエアフォースワンから降り立った、あの「横田基地」、その主権侵害については、日航機墜落事故の総括など、再三この場を借りて改善の必要性を指摘してきた。出入国の履歴すら残らない「横田」、政府高官、CIA等々、日本政府が把握できない出入国も自由自在だ。

「同盟国だし、そのくらいは譲歩しよう」。しかし、独立国家として首都圏の「領空侵害」だけは見過ごせない。空の「主権回復」は最優先課題だ。

2020に向け、改善が期待された「横田空域」だが、またまた白紙に戻された。そして、日本の航空政策、交通政策は、この「横田」によって数兆円の損害を背負い、現在進行形で損害は膨らんでいる。

首都圏の「領空」の制空権を、何と異国に支配され、物申すことすら許されない。その代償である高い運賃と、時間の無駄も国民負担である。

何より、自国の「空」、首都の「空」すら、自由に飛べないなんて、どういうことだろう。わたしたちの空を覆う「横田の壁」が、航空オペレーションを歪にし、空の安全を脅かしている。毎日見上げる東京の空は、まさしく「異国の空」だった。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中